

大学における運動部の実態調査：入部・不継続理由 について

須崎，康臣
九州大学大学院人間環境学府

入部，祐郁
九州大学大学院人間環境学府

杉山，佳生
九州大学大学院人間環境学研究院

齊藤，篤司
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1654298>

出版情報：健康科学. 38, pp.33-41, 2016-03-28. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

—研究資料—

大学における運動部の実態調査 —入部・不継続理由について—

須崎康臣¹⁾, 入部祐郁¹⁾, 杉山佳生²⁾, 斉藤篤司^{2)*}

Intercollegiate athletic clubs at university: The reasons for participation and lack of participation

Yasuo SUSAKI¹⁾, Yuka IRIBE¹⁾, Yoshio SUGIYAMA²⁾, and Atsushi SAITO^{2)*}

Abstract

The purpose of this study is to examine the reasons for participation in intercollegiate athletic clubs at university, through the use of text mining. A questionnaire survey was conducted among university freshmen (N=1,087). The questionnaire inquired about participation in athletic clubs at high school and at university, as well as the reasons for participation in intercollegiate athletic clubs at university. The results indicated that 35% of university students participated in intercollegiate athletic clubs. Of the students who participated in high school clubs, 39% did not participate in intercollegiate clubs. Words that appeared frequently in free descriptions regarding the reasons for participation in intercollegiate athletic clubs at university were analyzed using morphological analysis. Next, refined categories were analyzed using category web. The following discoveries were made: (1) attitudes toward sports, previous participation in high school athletic clubs, and health influenced the likelihood of participating in intercollegiate athletic clubs at university; (2) the lack of participation in intercollegiate athletic clubs at university was dependent upon a variety of personal values and environmental factors.

Key words: intercollegiate athletic clubs, text mining, free-text answers, morphological analysis

(Journal of Health Science, Kyushu University, 38: 33-41, 2016)

1) 九州大学大学院人間環境学府, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, Kasuga, Japan.

2) 九州大学大学院人間環境学研究院, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Kasuga, Japan.

*連絡先: 九州大学大学院人間環境学研究院 〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6-1 Tel & Fax : 092-583-7854

*Correspondence to: Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, 6-1 Kasuga-koen, Kasuga City, 816-8580, Japan.

Tel & Fax: +81-92-583-7854 E-mail: saito@ihs.kyushu-u.ac.jp

はじめに

定期的なスポーツ参加は健康の維持・増進に対して大きな役割を果たしており、充実した生活を送る上で重要な事であると考えられる。大学生の時期からスポーツ参加を行うことは、その後の生涯スポーツの実践に大きく寄与することが指摘されており¹⁾、大学生のスポーツ参加を促すための支援が重要になると考えられる。

大学生のスポーツ参加を促すには、大学でスポーツを行う機会を提供する必要がある、その機会として部活動が挙げられる。大学で部活動に所属することで、スポーツを行うための環境が得られ、スポーツ参加につながることを考えられるためである。大学生のスポーツ参加と関連する要因について、スポーツ参加と部活動への所属には正の相関^{2,3)}および正の規定力⁴⁾が認められていることが報告されている。入口ら²⁾は、大学の運動部、同好会、地域や企業が経営するスポーツクラブを含めたスポーツクラブ参加がスポーツ参加と高い正の相関を報告している。多々納ら³⁾は、大学のスポーツクラブ経験とスポーツ実施頻度との関係について、男女ともに弱い正の相関を認めている。丹羽・長沢⁴⁾は、女子大生のスポーツ参加に対して大学での部活動経験が約40%の規定力を示すことを明らかにしている。そのため、運動部への入部を促すには、大学生の入部理由について把握することが重要となる。運動部に対する参加動機⁵⁾や運動部ではないがスポーツ系サークルに関する入部理由^{6,7)}について検討が行われている。山本⁵⁾は、運動部への参加動機として「回避」、「達成」、「健康・体」、「親和」、「自由・平等」、「固執」、「社会的有用性」の7因子を抽出している。川端⁶⁾は、スポーツ系サークルへの所属理由として、友人関係の構築や運動欲求を満たすこと、スポーツに対する愛好的態度があることを報告している。また、運動部やスポーツ系サークルに所属している大学生の入部理由の違いについて検討が行われている^{1,8)}。蔵本・菊池¹⁾は、運動部に所属している大学生はスポーツ系サークルに所属している大学生に比べて、スポーツでの達成意欲とスポーツを通して得られる社会的な便益に関する認知が高いことを明らかにしている。このことから、大学生はスポーツや運動が好きといった愛好的態度や友

人との交流、体の健康、自由さといった多様な動機から運動部やスポーツ系サークルに所属していることが推察される。

ところで、中学校と高校での運動部に所属する割合は減少しており⁹⁾、この傾向は大学においても報告されている¹⁰⁾。橋本ら¹¹⁾は、高校で運動部に所属していた約3割の大学生は大学の運動部に入部していないことを明らかにしている。大学で運動部に入部しない理由は、運動部に対する価値観の多様化¹²⁾や否定的な考え^{6,13)}、さらにスポーツ系サークルへ入部する大学生の増加^{13,14)}が考えられている。つまり、高校で運動部に所属していた大学生が大学で運動部に入部していないことが減少理由の一つと考えられる。

運動部への入部を通して、大学でのスポーツ参加を促すことは生涯スポーツの観点から捉えると重要な事である。運動部への入部を促すためには、運動部への入部理由と不継続理由を検討することが大切になる。これらの理由を検討することによって、運動部に関する指導や運営に関する問題に対する示唆を得ることができ、運動部の活性化につながることを指摘されている¹⁾。しかしながら、運動部への入部理由に関する研究は少なく^{1,5)}、不継続理由について検討されていないのが現状である。また、山本⁵⁾は、参加動機に関する理論を援用した尺度作成を行い参加動機に関して検討を行っている。蔵本・菊池¹⁾は山本⁵⁾の尺度を用いているため、入部理由について限定的な側面から検討されているのにすぎない。

部活動への入部理由と不継続理由を包括的に明らかにするためには、多数の大学生から質的データを収集し、検討する方法が重要であると考えられる。この方法として、大量の質的データから新たな知見を導くことができるテキストマイニングが有効であると考えられる。テキストマイニングとは、「単なる検索や分類整理とは異なり、複数の文章データの内容を総合的にとらえることで初めて得られる知見を抽出するための内容分析の技術」¹⁵⁾である。

以上のことから、本研究は、テキストマイニングを用いて大学での運動部の入部理由もしくは不継続理由について探索的に分析することを目的とする。なお、本研究では運動部を、大学が認可する体育会系に所属

するスポーツクラブであり、体育会系に所属しない任意の団体であるスポーツクラブ系のサークル・同好会をスポーツ系サークルとする。

方法

1. 対象者

大学に在籍する大学体育授業を履修した初年次学生を調査対象者とし、1,087名の回答が得られた。このうち、高校での運動部所属の経験を有する、もしくは、大学での運動部に所属している589名の自由記述をテキストマイニングの分析対象とした。

2. 調査内容

1) 高校での運動部

高校時の運動部所属の有無について回答を求めた。また、所属していた場合は、運動部名と競技成績を記載させた。

2) 大学での運動部

運動部所属の有無について回答を求め、所属している場合は、運動部名を記載させた。また、高校から大学で同一種目を継続している場合は継続理由を、高校から大学で異なる種目の運動部に所属した場合、もしくは、大学で初めて運動部に所属した場合は、入部理由を記載させた。高校で運動部に所属していたが、大学で運動部に所属していない場合は、継続しなかった理由について記載させた。その際、何らかのサポートの有無による入部の可能性について、サポートの内容とともに記載させた。なお、入部理由と継続理由は入部理由としてまとめて分析を行った。

3. 調査方法

調査は、2015年6月に大学体育授業の時間に質問票を配布し、回答させた。なお、本調査票は無記名とし、回答は自由意志であり、回答に協力しなくても不利益を被らないことを説明の上、実施した。

4. 分析方法

基本的属性などの数量データについては、SPSS (Ver. 19.0) を用いて、単純集計を行った。また、入部理由および不継続理由に関する文字のテキストデータ（自由記述）は、テキストデータに対して分析を可能にするテキストマイニングツール PASW Text Analytics for Surveys (Ver. 4.0.1) を用いて以下の手順で実行した。

まず、研究者により事前に複数回にわたってテキストデータの読み込みを行った上で、入部理由および不継続理由を適切に表現していない記述を一律に解析対象外とした。また、文意を変えないように留意した上で、つづり間違い、入力ミスなどの修正を行った。修正後のテキストデータに対して、記述からキーワードを抽出する形態素解析を行い、抽出されたキーワードのカテゴリ化を行う。さらにカテゴリ間の関係性を把握するため視覚化を行った。

カテゴリ化は、出現頻度に基づく手法でカテゴリを作成し、また、キーワードを確認しながら必要なカテゴリを作成した。視覚化にはwebグラフを用いた。webグラフの丸印はノードと言い、カテゴリの事である¹⁶⁾。ノードの大きさはレコードの数に基づいた相対的なサイズを示している。そして、カテゴリ間の線の太さは重複している共通のレコード数を示している。また、ノード間の距離に意味はなく、カテゴリ間の関係性を視覚的に捉えるために用いている。

結果

1. 高校・大学での運動部の所属について

高校で運動部に所属していた者は535名で、そのうち大学で運動部に所属している大学生は209名(36.6%)であった。高校で運動部に所属していなかったが、大学で運動部に所属している者は54名であった。その内訳を表1に示した。また、高校で運動部に所属していた競技種目は、「テニス(17.3%)」が最も多く、次いで「サッカー(12.2%)」、「陸上競技(10.0%)」、「弓道(8.4%)」、「バドミントン(8.2%)」の順であった。

大学での所属運動部の競技種目は、「野球(10.2%)」、「テニス(9.8%)」、「バスケットボール(5.7%)」、「陸上競技(5.3%)」の順に割合が多かった。大学で高校と同一種目を継続した大学生は、118名(55.9%)おり、大学から種目を変更した大学生は91名(44.1%)であった。なお、表2に高校と大学で所属していた運動部の割合が高かった上位10種目を示した。

さらに、表3に大学で部活動に入部しなかった学生にサポートの有無での入部可能性についての結果を示した。「いいえ」と回答した者は40%であったが、「はい」と回答した者は20%であった。「はい」と回答し

表1 対象者における運動部所属の内訳

		大学	
		所属	無所属
高校	所属	209人	326人
	無所属	54人	498人

表2 高校と大学での運動部所属の種目名

高校			大学		
種目	人数	割合	種目	人数	割合
テニス	95	17.3	野球	27	10.2
サッカー	67	12.2	テニス	26	9.8
陸上競技	55	10.0	バスケットボール	20	7.6
弓道	46	8.4	バドミントン	15	5.7
バドミントン	45	8.2	陸上競技	14	5.3
バスケットボール	44	8.0	ラクロス	11	4.2
野球	32	5.8	アーチェリー	10	3.8
卓球	28	5.1	サッカー	9	3.4
バレーボール	23	4.2	ゴルフ	8	3.0
ハンドボール	22	4.0	ラグビー	8	3.0

テニスは硬式テニスと軟式テニスを含む

表3 サポートの有無で部活動の入部可能性の人数 (%)

はい	いいえ	どちらともいえない	無回答
66 (20.2)	134 (41.1)	22 (6.7)	104 (31.9)

表4 サポート内容

カテゴリー	頻度	記述内容例
補助金の援助	8	遠征費を出してくれたら
練習頻度の少なさ	8	もっと日数が少なかったら
移動距離の短さ	6	家から練習場所が近かったら
単位認定	2	公欠をとらせてくれたら
自由な練習雰囲気	2	自由に参加してよい雰囲気があれば
課題の少なさ	2	授業での課題が少なくなったら
充実した設備	1	公式試合が行える競技場

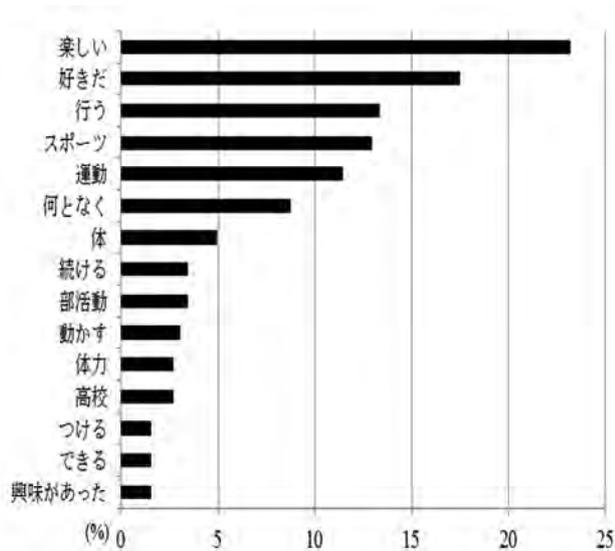


図1 運動部の入部理由に関する形態素の出現率

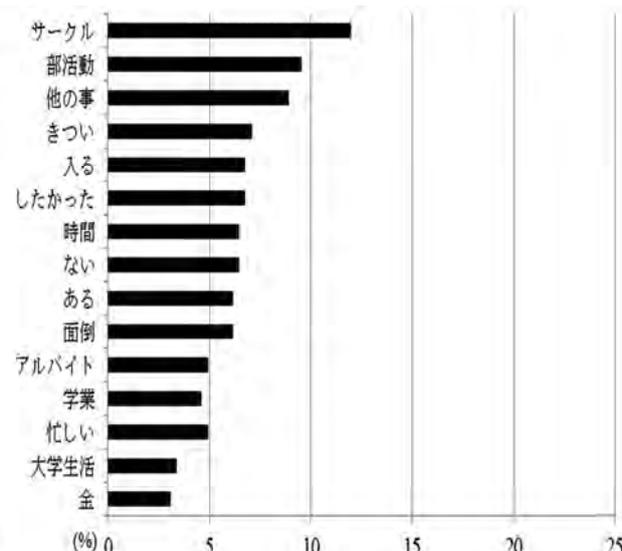


図3 運動部の不継続理由に関する形態素の出現

た者でサポート内容を記載した結果を表4に示した。求めるサポートの回答は補助金の援助や練習頻度の少なさ、短い移動距離が多かった。

2. 大学での運動部への入部理由の抽出

対象者から得られた大学での運動部への入部理由に関する自由記述の総計は263個であった。これらの自由記述に対して、キーワード抽出を行った。上位15での出現頻度が高かった単語を図1に示した。次に、出現数7回以上のキーワードに限定してカテゴリの抽出を行い、また、必要なキーワードからカテゴリの調整を行った結果、19個のカテゴリが作成された。そこで、カテゴリ間の関係をwebグラフで視覚化し、リンク数が4個以上のカテゴリを列挙すると「スポーツ」—「行こう」、「スポーツ」—「好きだ」、「体」—「動かす」、「運動」—「好きだ」、「運動」—「続ける」、「体力」—「獲得・達成」、「部活動」—「中学・高校」、「中学・高校」—「行こう」、「体」—「好きだ」、「動かす」—「好きだ」、「好きだ」—「楽しい」であった(図2)。ここで挙げたカテゴリ間の記述例として、「スポーツを行うことが好きだから」、「体を動かすことが好きだから」、「運動を行うことが好きだから」、「運動を続けたいから」、「高校の時に運動部に入っていたから」、「中学校の時にスポーツを行っていたから」、「好きで、楽しいから」、「体力をつけたいから」等であった。

3. 大学での運動部への不継続理由の抽出

対象者から得られた大学での運動部への不継続理由に関する自由記述の総計は326個であった。これらの自由記述に対して、キーワード抽出を行った。上位15での出現頻度が高かった単語を図3に示した。次に、出現数7回以上のキーワードに限定してカテゴリの抽出を行い、また、必要なキーワードからカテゴリの調整を行った結果、27個のカテゴリが作成された。そこで、カテゴリ間の関係をwebグラフで視覚化し、リンク数が5個以上のカテゴリを列挙すると「学業」—「専念」、「サークル」—「入る」、「したかった」—「時間」、「部活動」—「きつい」、「他の事」—「ある」、「他の事」—「部活動」、「時間」—「制限」、「したかった」—「他の事」、「したかった」—「サークル」、「したかった」—「部活動」、「部活動」—「ない」、「練習」—「きつい」、「時間」—「ない」であった(図4)。ここで挙げたカテゴリ間の記述例として、「学業に専念したいから」、「サークルに入ったから」、「自由が欲しい」、「部活動はきついから」、「練習はきついから」、「他にしたいことがあるか」、「時間がかかるから」、「他の部活に入ったから」、「時間がないから」、「サークルでしかなかったから」、「したかった部活動がないから」等であった。また、キーワードでの抽出が高かったものとして「金」があり、これと関連するキーワードは「かかる」と「面倒」であり、これは「お金がかかるから」ということであった。

考察

1. 対象者の高校・大学での運動部の所属の特徴

大学で運動部に所属している学生は、高校で運動部に所属していた者が多いことが示された。この結果は、先行研究^{3,6,12)}と同様に高校での運動部の所属が大学での運動部への入部に寄与することが示唆された。しかし、高校で部活動に所属していたにも関わらず大学で運動部に入部していない者は39.1%おり、これは先行研究¹¹⁾と同様の結果を示すものであった。これは、運動部に対する価値観の多様化¹²⁾や否定的な考え^{6,13)}、さらにスポーツ系サークルへ入部する大学生の増加^{13,14)}が考えられる。

また、高校で無所属であった学生の内、大学で運動部に入部した学生は10%を示していた。しかし、橋本ら¹¹⁾が九州県内の大学と短期大学で2003年に行った調査では、このような学生は40%いることを報告している。このように先行研究と比べて、本調査結果での入部割合は少なくなっていた。この入部者の割合が減少した理由として、部活動に対する否定的な考えが影響していることが考えられる。川端⁶⁾は、運動部とスポーツ系サークルに所属しない理由として、面倒であり、スポーツが苦手で、疲れるからといったことを報告している。兵頭¹³⁾と吉村¹⁴⁾は、スポーツ系サークルへの入部傾向が高まっていることを明らかにしている。このように運動部への否定的な考え方や運動部ではなくスポーツ系サークルへの入部傾向が高まったため、大学での運動部への入部が減少したことが考えられる。

さらに、入部割合の高い運動部の種目は、高校と大学で傾向が異なっていた。異なる種目への運動部に入部している大学生は44.9%であった。これは、高校から大学に進む過程で他の運動部に対する興味が高まり、種目の変化が生じたため、入部している部活動の種目が高校と大学で異なると考えられる。

加えて、大学で部活動に入部しなかった大学生にサポートの有無での入部可能性で、サポートがあれば入部したと回答した者は20%いた。サポート内容として、補助金の援助や練習頻度の少なさ、短い移動距離が挙げられた。このことから、大学側が運動部に所属する大学生への補助金の援助や充実した練習環境を用意し、運動部は練習に対して自由に参加できる雰囲気を作る

といったサポートを行うことで入部を促すことが可能になると考えられる。

2. 大学での運動部への入部理由の抽出

運動部への入部する理由として、スポーツや運動が好きだからや体を動かすことが楽しいといったことが挙げられた。この点について、入口ほか²⁾は、スポーツへの愛好的態度がスポーツクラブ参加に正の影響を及ぼすことを報告している。また、運動部ではないがサークルの所属理由に関して、「何か運動をしたくて、そのスポーツが好きだから」⁵⁾、「その活動が好き」⁷⁾、「趣味からの選択」¹²⁾といった理由が挙げられている。そして、丹羽・松村¹⁷⁾はスポーツ参加の動機としてスポーツが好きや体を動かすことが好きといった活動性に関する動機を明らかにしている。このことから、スポーツや運動が好きや楽しいといった愛好的態度が運動部への入部に寄与していることが考えられる。

また、運動部の入部理由として、中学や高校での運動部やスポーツの経験を理由として挙げていた。これは、先行研究^{3,6,12)}と同様に、過去の運動部の所属やスポーツ経験が大学での運動部の所属に関連していることが考えられる。

さらに、体力がつくために運動部に入部しているという理由が挙げられた。山本⁵⁾と蔵本・菊池¹⁾は運動部の参加動機に関して、体力がつくからや健康のためによいからといった健康に関する動機を明らかにしている。そして、丹羽・松村¹⁷⁾は女子大のスポーツ参加について、健康に関する動機を報告している。これは、スポーツや運動を手段として捉えて、スポーツや運動を通して健康になることを目的にしており、その手段を実現する方法として運動部へ入部していることが推察される。

以上のことから、入部理由としては、スポーツや活動に対する愛好的態度、過去の経験とスポーツによってもたらされる効果を期待していることが確かめられた。そのため、大学で部活動への入部を促すためには、スポーツや部活動に対する愛好的態度や健康に関する意識を高めることが重要であると考えられる。

本研究では、部活動への入部理由は、男女まとめて分析したが、男性と女性ではスポーツや部活動に対す

る価値観や大学での取り巻く環境が異なることが推察される。そのため、性別での入部理由について検討していく必要があると考えられる。

また、運動部を対象に検討を行ってきたが、スポーツ参加の観点に立つとスポーツサークルでの所属でもその役割を果たすことが可能であると考えられる。運動部だけではなく、スポーツサークルを含めて入部理由やその入部によってもたらされる学生生活への影響について検討していく必要があると考えられる。

3. 大学での運動部への不継続理由の抽出

運動部への不継続理由の一つとして、サークルへの参加が確かめられた。先行研究において、サークルに参加する学生の増加傾向にあり^{13,14)}、それに伴い運動部の部員が減少にあることが報告されている¹⁰⁾。この要因として、学生の部活動とサークルに対する価値意識が関連していることが指摘されている¹²⁾。蔵本・菊池¹⁾は、運動部とサークルに所属する大学生の参加動機について検討を行っており、サークルに所属している大学生は運動部に所属している大学生に比べて、会員との繋がりや自由な雰囲気や仲間づくりを求めていることを報告している。さらに、本結果から、不継続理由として運動部や練習のきつさが理由として挙げられている。兵藤¹⁵⁾は運動部に入部しない理由として、「練習が毎日あるし、また、激しく、規律がやかましい」ということを報告している。これらの点を踏まえると、運動やスポーツを行いたいが、運動部でのきつい練習が嫌なため、運動部に入部せずに、自由な雰囲気や仲間づくりを求めて、サークルに所属していることが考えられる。

また、時間や自由がほしい、他にしたいこと、他の部活動に入部したといったことが不継続理由として挙げられた。川端⁶⁾は、運動系クラブに所属しない理由として、「他にやりたいことがあるから」といった理由が挙げられたことを報告している。渡邊・高橋⁷⁾は、スポーツ系サークル無所属者における無所属の理由として、「自由にふるまいたい」「他にやりたいことがある」「束縛されるのが嫌」といった理由を報告している。つまり、大学ではこれまでの学校生活と異なり、自由に活動を行える時間や活動範囲が広がることで、活動の選択肢が増えるため、運動部へ入部せずに運動部以

外の活動を選択していることが考えられる。

さらに、学業に専念したいといったことが不継続理由として挙げられた。橋本ら⁸⁾は、学業への専心が高い学生ほど、運動部およびスポーツ系サークルへの入部意図が無いことを明らかにしている。つまり、学業意識が高いほど部活動との両立は困難と捉えてしまい、部活動への継続が阻害されていることが考えられる。

加えて、不継続理由として入部したかった部活動がないということがあった。対象とした大学は学生が複数のキャンパスに分散しており、キャンパスによって行われる部活動が限られている。このような環境状況が影響を与えてしまい、入部意図があるにも関わらず、部活動への不継続につながっていることが考えられる。

最後に、頻度が多かったキーワードとして「金」が抽出されていた。金と関連するキーワードでは、「かかる」と「面倒」であった。これは、金銭がかかるやお金が面倒であるという意味を示すものであった。浅井・内山¹⁷⁾は、金銭面は運動部への入部に対して抑制的に働くことが報告している。このことから、運動部はお金がかかるといった要因が入部を抑制することが考えられる。

以上のことから、部活動への不継続の理由として、スポーツや部活動への否定的態度と学業や他にしたいことへの専念といった価値観の多様化といった個人要因とお金や部活動を取り巻く状況といった環境要因が明らかにされた。部活動への入部を促すためには、否定的態度や多様な価値観を考慮しつつ、部活動の魅力伝えることや部活動と学業等を両立するための支援が重要になると考えられる。

まとめ

本研究では、高校および大学での運動部所属者を対象に、運動部の実態と運動部に対する入部理由と不継続理由について検討を行った。まず、高校で運動部に入部していた学生のうち、大学で運動部に入部するのは半数に満たなかった。そして、大学で運動部に所属していない学生でも適切なサポートを受けることで入部する可能性が示唆された。

次に、テキストマイニングを用いて入部理由と不継続理由の質的データから探索的に検討した。その結果、

大学での運動部の入部理由について、スポーツに対する愛好的態度や高校での運動への所属経験、健康に関する意識があることが確かめられた。

不継続理由について、サークルへの所属や他にしたいことがある、学業に専念したいといった価値観の多様性と部活動の有無やお金がといった学生を取り巻く環境要因が示された。

引用文献

- 1) 蔵本健太, 菊池秀夫 (2006): 大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究—体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較—. 中京大学体育学論叢. 47(1): 37-48.
- 2) 入口豊, 高橋健夫, 内山憲一 (1984): 大学生のスポーツ参加を規定する要因. スポーツ教育学研究. 3: 49-58.
- 3) 多々納秀雄, 金崎良三, 徳永幹雄, 橋本公雄 (1982): 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究 (2) —社会的要因について—. 健康科学. 4: 51-76.
- 4) 丹羽劭昭, 長沢邦子 (1978): 女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討. 体育学研究, 23(2): 109-119.
- 5) 山本教人 (1990): 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較. 体育学研究. 35: 109-119.
- 6) 川端雅人 (1998): お茶の水女子大学生の課外活動に関する研究—運動クラブについて—. お茶の水女子大学人文科学紀要. 51: 187-202.
- 7) 渡邊義行, 高橋雄一 (2002): 岐阜大学教育学部学生のサークル所属に関する調査研究. 岐阜大学教育学部研究報告(自然科学). 26(2): 23-31.
- 8) 橋本公雄, 内田若希, 村上雅彦, 船橋孝恵, 山崎将幸, 藤原大樹, 川淵大毅, 宮崎梓, 佐藤恭子, 堀田亮 (2005): 体育系運動部離れ現象の解明とその対策に関する研究 (3)—運動部入部の要因分析—. 九州地区大学体育協議会.
- 9) 文部科学省 (2008): 第 6 章 スポーツの振興と心身の健やかな発達に向けて, 第 5 節 学校体育の充実. 平成 20 年度文部科学省白書.
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200901/detail/1284289.htm (2016 年 1 月 19 日閲覧)
- 10) 的地修 (1987): スポーツ同好会志向のものを探る. 体育の科学. 37(5): 353-355.
- 11) 橋本公雄, 内田若希, 村上雅彦, 船橋孝恵, 馬場亜紗子, 山崎将幸 (2004): 体育系運動部離れ現象の解明とその対策に関する研究 (2)—大学生の諸特性および運動部入部関連要因—. 九州地区大学体育協議会.
- 12) 田中英之 (1987): 大学生の課外活動に関する研究—スポーツサークルについて—. 相模女子大学紀要. 51: 161-169.
- 13) 兵藤昌彦 (1979): 大学におけるスポーツ同好会の現状と課題. 体育の科学. 29(5): 327-331.
- 14) 吉村正 (1984): 早稲田大学におけるスポーツ同好会の実態調査(第 2 報) —活動の内容について—. 早稲田大学体育研究紀要. 16: 35-42.
- 15) 那須川哲哉 (2006): テキストマイニングを使う技術／作る技術 基礎技術と適用事例から導く本質と活用法. 東京電機大学出版局: 東京, pp1-64.
- 16) 浅磯崎幸子 (2012): 第 8 章 カテゴリパネル. 内田治, 川嶋敦子, 磯崎幸子(編). SPSS によるテキストマイニング入門. オーム社: 東京, pp.114-147.
- 17) 浅井修, 内山憲一 (1988): 女子大生の運動部活動への参加度と関係する要因の検討. 大阪樟蔭女子大学論集. 25: 233-242.
- 18) 丹羽劭昭, 松村洋子 (1979): 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究. 体育学研究. 24(1): 25-38.